

西高OBオーケストラ記念コンサートのご盛会を祈念して

北海道札幌西高等学校長 藤井茂男

昭和27年、当時7名のメンバーで活動を開始した西高音楽部器楽班が、その後活動の場を大きく広げて管弦楽団に発展、以来30数年の輝しい実績を積みあげて、高校のオーケストラとして今や全道、全国に名を馳せるまでに成長し、隆盛をみるに至っておりますことは、まことにご同慶にたえません。

校外に発表の機会を求めて始まった定期演奏会は16年目を迎えてますが、今や札幌市民も高く評価するところとして、着実にその成果を挙げております。この期間を含めて30数年の歳月は決して短いものではありません。顧みて、その時代時代の若い団員たちが、よなく音楽を愛し、高い藝術性を追求しようとする情熱が、この歴史を形成する大きな原動力となったものと思われます。それは若者たちの青春の歓喜と苦悩、誇りと挫折のおりなす歴史であり、自由を求め、真理を探ることに懸命であったまさに西高生の生き方を示す軌跡でもあります。青春の光と翳の色濃く投影された30年であったことと思います。

こうして巣立ったOBの方々は、すでに460名にも及んでいると伺いますが、昨年結成されたOB会の第1回記念コンサートがこのたび開かれることになりましたことは、まことに喜びにたえないところであり、心よりお祝いを申しあげる次第であります。

言うまでもなく先輩の活躍は、そのまま在校生の心奮う糧となり、それを支えとして在校生の努力の成果がまたOBの方々の後輩に対する深い愛情として再び発露されるという一体感が伝統を形成する根元であります。その意味においても今回のこの演奏会が、現在の団員に大きい刺戟と教訓を与えてくれるものと信じます。現役の生徒ではできない素晴らしい円熟した高水準の演奏が展開されるものとご期待申しあげ、ご盛会を祈念してお祝辞といたします。

わたしの玉手箱

加藤けん三

わたしの玉手箱は、4個の段ボール箱である。中味はすべて音楽会のプログラムで、昭和15年からのものである。その数は何百あるか何千あるか数えたことも無いが、その姿はさまざま、半切のざら紙にガリ版刷りのものから、1冊数千円もした豪華版まである。

浦島太郎の玉手箱も、バンドラの箱も開けてびっくりというものだが、わたしの玉手箱の中味は、他の人にとっては新聞の折り込み広告などの価値も無いかもしれないが、わたしにとってはまさに宝物である。

いつもは押入れの奥に眠っているこの箱もときには陽の日を見ることがある。調べ物の資料にするためである。一旦開かれた箱の中味は忽ちわたしをとりこにしてしまい、どっぷりと過去の思い出に浸ってしまう。強力な麻薬の効きめとでもいおうか、肝心の調べ物のこととは勿論、時のたつのも忘れてしまう。

ざら紙ガリ版刷りの1枚は、昭和20年3月、日比谷公会堂での日本交響楽団定期演奏会のものである。信じられない程粗末なこの1枚が、ずっしりとした重さでわたしに迫ってくる。

また戦後はじめて米田したオーケストラの、シンフォニー・オブ・ジ・エア、初来日のときのカラヤンとベルリンフィルなどのプログラムからは、音までが聴えてくる。

まして西高オケに関するプログラムは、まさに何をか言わんや、特別扱いである。そのプログラムに、共にわからち合える思い出を持った者達が相い集い、凝縮したものが今晚のこの演奏会である。このプログラムもわたしの玉手箱の特別席におさまるであろう。

文化とは、平凡な人達のささやかな営みが、そこはかとなく伝承され育てられていくものである。とたしは思っている。